

シーボーム著『イギリス村落共同体論』における 典型的三圃制集村 Hitchin Township について

小川 徹*

I. まえがき

1990年6月ロンドンに一週間滞在した折、Ebenezer Howard (1850-1928) の「近郊都市」論で有名な Welwyn Garden City を見学するために、ある日曜日 King's Cross 駅から郊外電車に乗って出かけたことがある。あいにく Welwyn Garden City 駅は全面的大拡張工事中、町は日曜とて公私機関とも一切ドアを閉じており、とりつく島もなく空しく帰途についたのだが、電車で揺られながら、ここからさらに30km

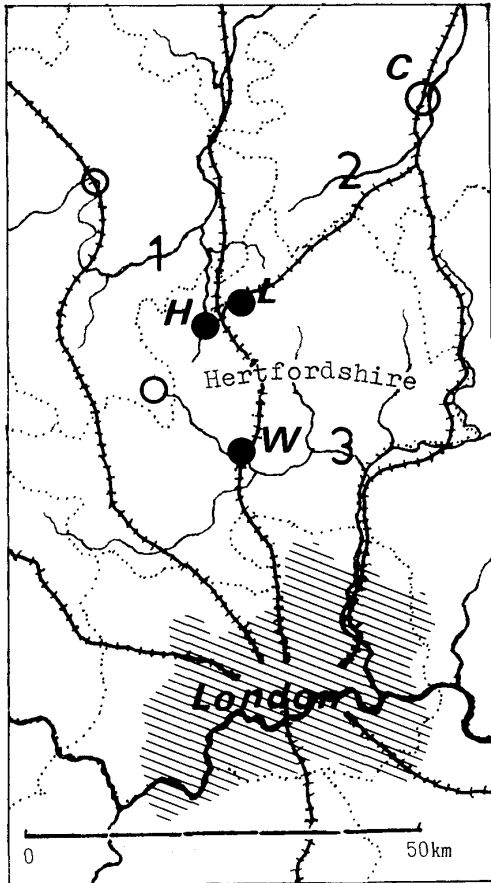


図1 Hertfordshire 郡略図

C : Cambridge	1 : Ouse 川
L : Letchworth	2 : Cam 川
H : Hitchin	3 : Lea 川
W : Welwyn-Garden-City	

ばかり北の Letchworth にも、約17年早い1903年に彼が試作的に建設した区画があったことを思い出して、ふと目をこらしたところ、15級の細いゴシックで Hitchin と印刷された町のあることが目についた。その東側には River Purwell とも記されているではないか。何と？ Seebohmの主著¹⁾で考証の主題をなした Hitchin Township がここにあったとは！

集落地理学はまず村落地理学の具象的把握から出発すべきである。学史的にみても村落地理学はまず村落形態の分析から出発している。この場合、方法論的にあの社会形態学の自己主張との関係が避けて通れぬ課題となるわけであるが、村落形態学は理論的にみて農業生産との機能的関連性の追求が第一義であり、Vidal de la Blache も指摘しているように、集村か散村かの形態学的分岐を単純に水理条件の差に求めるような環境論的偏向に陥らぬことが要請される。この点、イギリスを代表する Frederic Seebohm (1833-1912)、ドイツを代表する August Meitzen (1822-1910)、フランスの Marc Bloch (1886-1944) のいずれもが正しい方法を適用していることに注目したい。このうち、Bloch²⁾ はもっとも新しく史料の解釈

も方法論的に優れている反面、地図の表現がいかにも歴史学的で無造作である。Meitzenは論述・史料（とくに実測図）とも洪涵で正に力作といえるが、「民族性」という有害無益な要因を持ち込んでしまった³⁾。Seeböhmは業績としてはもっとも早い、「囲い込み」の国情から考証は Hertfordshire 郡下の一村の事例にとどまらざるを得なかった。この村はイギリス王室王妃の御料地であったから「囲い込み」の影響を蒙らなかったのであるが、その御料地がよほど辺鄙な地域にあったからでもあったように誤解したまま数十年を経てしまった。この誤りを学生諸君に対して是非訂正をしておきたい。これが本稿の趣旨である。

II. Hitchin と Frederic Seeböhm

計らずも所在を知ったのだが、そうすると今度は両者の関係、ことにSeeböhmがどのようにしてこの村落の歴史に興味をもつに至ったのか、そしてその好奇心を満たすだけの有力な史料をどのようにして見出したのかが知りたくなる。帰宅してすぐに地図上の博物館あてに照会状を書いてみた。すると折り返し Hitchin Museum の Acting curator, Alison Taylor なる人から親切な返事をもらうことができ、一層の好奇心をそそられ、秋を待って再度ロンドンを訪れるに至った次第である。

しかし、欲ばった日程であって、一つの用事を済ませ、娘にも会い、2万5千分の1の地図を買い込むなどしているうちに、採訪の日程はまたもや1日に限られてしまった。電話で日時を打ち合わせて最初にびっくりさせられたのは、当の学芸員が若い女性であったことである。この辺の町村の多くにみられるように、郷土資料館、図書館、それに展覧会場を設けた施設を管理しており、所蔵する史（資）料はすべてコンピューター整理されているのを迅速かつ親切に見せてもらえた。以下は彼女の教示による。

Frederic Seeböhmは、England 北部 Yorkshire の小邑 Bradford の生れであるが、両親は Hitchin の人であった。Cambridge で法学を学び、弁護士の資格を得た。その間どのような活動を行ったかは未詳であるが、彼が50歳で著した主著の中扉の表記から、同じ書店からすでに4冊の著書を出版しており、うち3例までが宗教上の問題を取り扱った題名の本で、最後の1冊が農業制度の問題であったことが窺われる。この地の上層階層には Quaker 宗徒が多かったそうであるが、同郷の銀行家の娘を娶ってからは Hitchin にあって義父の業務を助け、傍らこの種の問題を考察したものらしい。イギリス王妃領の Hitchin Township に残存していた豊富な^{ちかた}地方史料に着目してこれを読破した結果がこの主著であった。同書序文の謝辞からみて、彼は Ancient Law (1861) の著者 Henry James Sumner Maine の知遇を当時すでに得ていたようであるし、August Meitzen と文通しており、旧知の間柄であったらしい。しかし Meitzen の業績として挙げられるのは、Ausbreitung der Deutschen (1879) でしかない。主著の『イギリス村落共同体論』の中扉に、ケンブリッジとオックスフォード両大学か



(Photothèque of the Hitchin Museum, 所蔵番号269-3)

写真1 F. Seebohmとその家族

1891年、長女 Juliet の結婚式に際しての記念撮影。後列左から4人目が Seebohm である。

ら文学博士号を、エディンバラ大学から名誉法学博士号を受けたことが記されており、大学で講義したこともあったのではあるまいか。とりあえず、博物館所蔵の写真から、彼の風貌を偲ぶことにしたい。

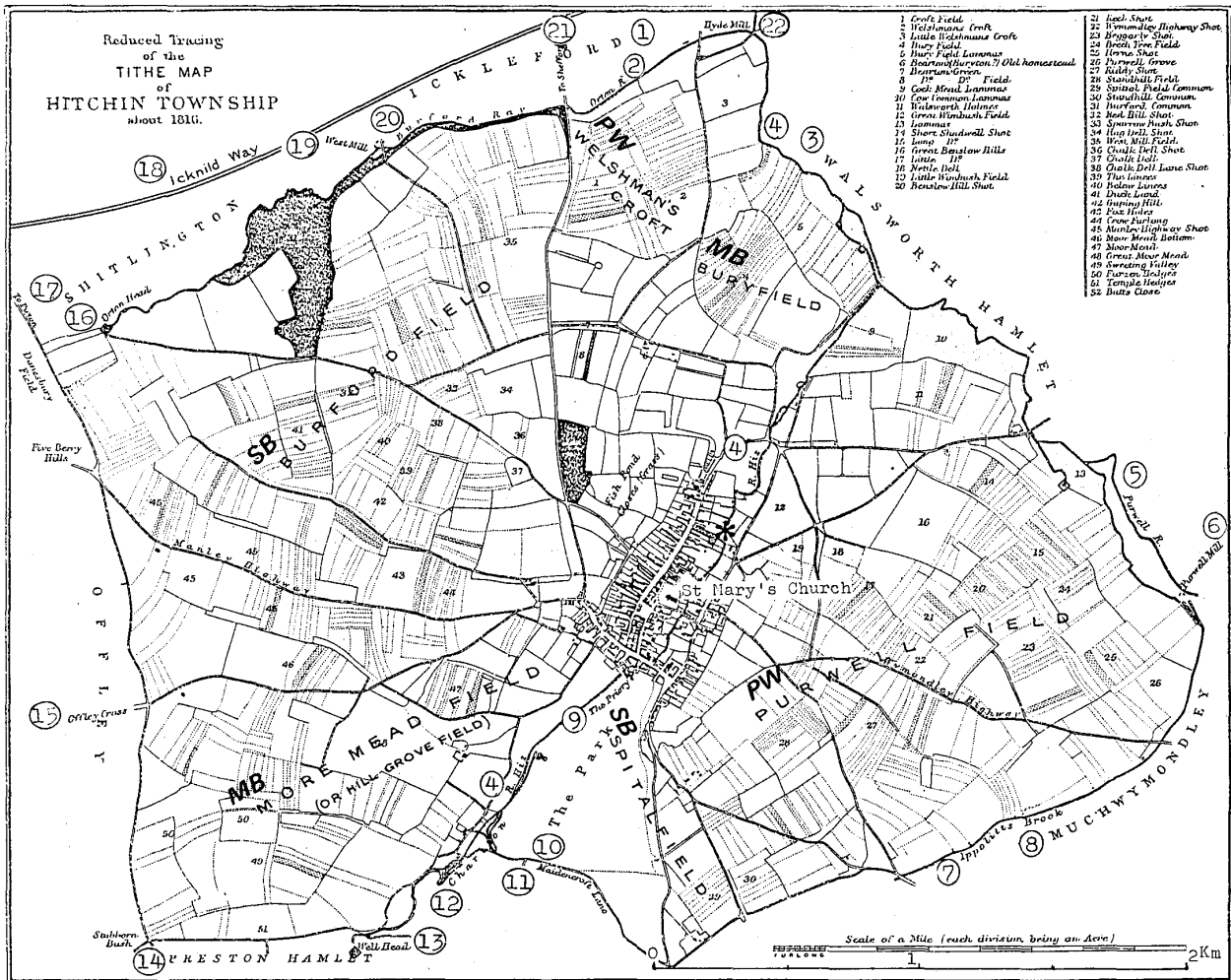
Ⅲ. Hitchin Township の解体と林間都市化

行政面や経営の面から、どのような経緯があったかは当面明らかにする能力はない。ここでは百余年前の村落共同体の実測図と、現行2万5千分の1地図との対比を読者に要請するにとどめる。実測図はおそらく図工の手によるもので、著者の自筆とは考えられないが、地図的表現への関心が高かったことがよく窺われる。『イギリス村落共同体論』には15個の図版が含まれるが、2図を除いて他はみな実測図であるなど、歴史書としてはすこぶる異彩を放っており、われわれにとって史料としては万金に値するとの感に堪えない。ただこの第2図で用いられた「十分一税地図」が西暦何年の実測によるものであるか残念ながら今は不明であるが、「村落共同体」を形成している村落を Township といったことは確かなのである¹⁾。余言ながら、

米・加両国の土地区画制だけが Township ではないのである。

この図 2 を見て気付かせられるのは次の諸項である。

1)境界が不分明な場合が少なくないが、村の耕地は大小各 3 個の Field に分割され、PW・MB・SBの略号で示した 3 群の耕地を単位として Three Field System が古くからの制度となっていた。イギリスの場合、「囲い込み」の流行からこの共同体輪作制が国土全域にわたって破壊され、ここ Hitchin に見られるような耕作景は全くといってよいほど失われた（ただし、このことは農業そのものの破壊ないしは衰亡を意味するものではなかった）。調査の時点ではまだ良きインフォーマントが多かったのであろう。多くの Shot の小字名が採集されている。また、同書所収第 5 図 (p. 26~27) に示された一農家 (*) の持ち分を転写してみると、彼が全耕地にわたって約 30 枚の短冊状耕地片 Strips を持ち分として保有していたことがわかる。



(Cited by the permission of the Cambridge University Press, 1992)

図 2 1816年の時点における Hitchin Township

この図は左上隅に記された通り「十分の一税図」による復元。おそらくまだ都市化以前。右上隅は shot 名称。原書第 5 図に示すある農家 (*) の耕作地持分 strips を転記した。彼の持分 (網目印) 約 30 枚は全域に散在している (本図は注記の通り C.U.P の了承を得て複写したものである)。



(Reproduced from the 1984, 1988 and 1990 Ordnance Survey 1 : 25,000 maps with the permission of the Controller of Her Majesty's Stationary Office, © Crown Copyright)

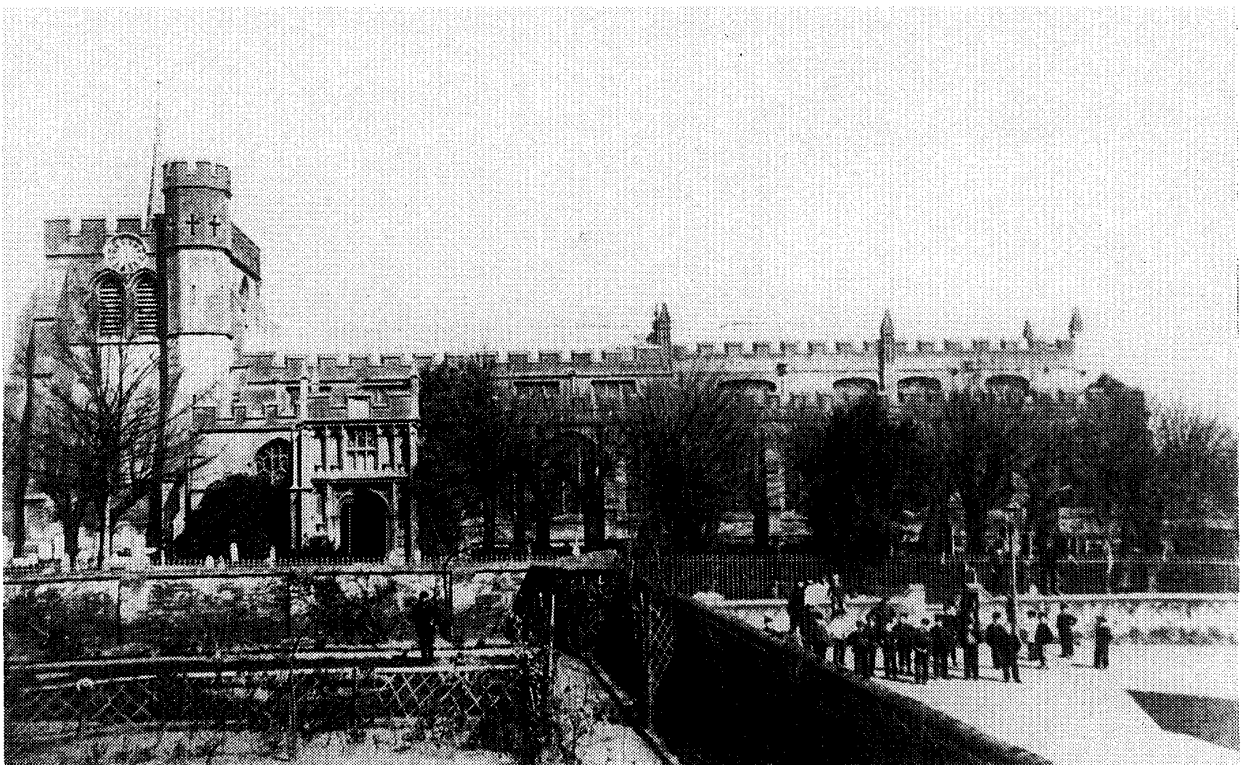
図3 Hitchin Township の変容

Hiz 川は半ば暗渠化し River Oughton との合流点近くでは浄水場に注ぐ。近郊住宅街のスプロール化は皆無。一步出ればそこには巨大農場経営の Open field 景観が卓越していて、その意味で田園と都市とが共存しており、都市の進出は発展でこそあれ、農業の衰亡とはなっていない (本図の掲載については注記のごとくイギリス Ordnance Survey の Copyright Branch の許可を得ており使用料も支払ってある)。

2)集落は図上に丸印する④ヒズ川 River Hiz 沿いに集村を形成し、入会山林採草地さえ乏しく、⑫ Charlton Hamlet 背後の丘に風車小屋があるだけで、典型的な Open Field の景観が展開している。逆説すれば、耕地内に農民は住居を設立し得ない。これが Three Field System = Open Field の鉄則だったのであり、そのことから「三圃制集村」が産み出されたのである。

3)風車がまったく無かったのではなかったが、製粉の主力は水車であった。今回気付いたことのひとつは、Hitchin 地域内の河川は例外なく泉を谷頭としている。地名がそれを物語っている。⑤ River Purwell の上流部を⑦ Ippollitts Brook というが、谷頭には小さいけれど池がある。④ Hiz River の谷頭は⑬ Well Head と呼び、(spr) と注記までしてある。②River Orton は現在は Oughton River と記すが、その谷頭は泉⑭ Orton Head である。この地域は Chiltern Hills の中央部に当るが、高度は最高でも100mそこそこ、比高30m程度の崖を北に向けている。分水嶺に当たる地点からわずかに下ると、多数の泉が湧き出て北流し、River Ouse 川に合流して北海に注ぐのだが、谷頭部の泉からの水量が多く、⑥ Purwell Mill, ⑰ West Mill, ⑱ Hyde Mill などが当時は活躍していた。これらの地名は新しい2万5千分の1地形図上にも残っている。

4)Hitchin Township の名称が④ River Hiz に負っていることは充分窺える。これらはおそらくはケルト起原の先住者が命名したのであろう。⑲ Icknild Way もローマ植民時代より



(Photothèque of the Hitchin Museum, 所蔵番号428-5)

写真2 セントメリー教会

村の教会としては郡下最大の規模を誇っている。



(Photothèque of the Hitchin Museum. 所蔵番号196-2)

写真3 1870年頃の市場広場

広場の西南角より眺めたものであるが、現状もほとんど変わりが無い。左端の鐘楼風の尖塔を持つ建物は当時の「穀物取引所」、現在売りに出されている。

古い名称で、西は Somerset に達し、東は Cambridge 東南の小村 Ickleton に及ぶ古代道路で、それが Hiz を渡る地点が① Ickleford となるのである。ローマ時代の道路、農場ないし集落の遺蹟は Hertfordshire 郡下に共通して、かなり豊富である。集村の形成がいつ頃かははっきりと断言はできないが、六頭の牡牛に巨大な犁を索かせる中世的大農法のためにも、村落共同体の三圃制農業は厳守された。農家は分割の跡を窺わせる短冊型の“囲い中庭型”が主流であった。三圃制農村の基本的核心として教会と広場がなければならぬが、この村の教会 St. Mary's Church は14世紀に建てられた王室の教会で規模は郡下で卓越して大きい。一方、広場は教会から少し離れて作られている点、やや変形的である。

5)変容した現状については、まだ資料が乏しく、断定的な論述は避けねばならぬ。予察的に問題点としてメモするにとどめるが、Hitchin Township の三圃制農村集落はよく旧状を残している。これを取り囲んで、前世紀後半から近郊住宅化が進むのだが、旧来の Shot や Strips の地割とよくなじんだ住宅地が作られている。職住近接という点からみると、やや工場の進出が弱いので、ロンドン労働市場への依存度が大きいのではあるまいか。短冊形道路に沿って軒を連ねた規格住宅で、中庭の利用法は外部からは窺い知りにくい。前庭式敷地に一戸建ないし二戸一棟の住宅地は2万5千分の1地図上で見る限り、少数である。街路樹も多くないようで、林間都市的景観の印象は弱い、最終的判断は再検討を待たねばならない。

注

* 本学地理学科元教授。1990年停年退職。

- 1) 詳細は参考文献①参照。
- 2) 文献⑤参照。
- 3) 文献④参照。この稀観本は学生時代、経済学部図書室で閲覧したに止まり、以後は黒正巖(訳)『ウェーバー 一般社会経済史要論』(1927, 岩波書店)の冒頭にある詳細な引用を利用するのみに終わった。なお、戦後の再版、また青山秀夫による改訳は利用したことがない。
- 4) の黒正訳本については文献⑥を参照。

参考文献

- ① Frederic Seebohm (1883): *The English Village Community — Examined in its Relations to the Manorial & Tribal System of Husbandry — An Essay in Economic History.* (Fourth Edition in 1890. Reprinted in 1905 & 1915 by Longmans, Green & Co. Reprinted and Published after 1926 by the Cambridge University Press)
- ② Seebohm (1895): *The Tribal System in Wales.* (筆者未見)
- ③ Seebohm (1902): *The Tribal System in Anglo Saxon Law.* (同上)
- ④ August Meitzen (1896): *Siedlung und Agrarwesen der Westgermanen und Ostgermanen, der Kelten, Römer, Finnen und Slaven.* 3 Bde.
- ⑤ Marc Bloch (1931): *Les caractères originaux de l'histoire rurale Française.* Oslo.
- ⑥ M. Weber, bei Hellmann, S., Palyi, M. (1924): *Wirtschaftsgeschichte. Abriss der universalen Sozial- und Wirtschaftsgeschichte.* München und Leipzig.